



サ ラ ナ



No.24 長寿寺報 令和2年11月

なぜ、戒名をつけるのか。

皆さん、ごきげんよう。前回、不飲酒戒について触れましたので、その延長として戒名について記したいと思います。まず、皆さんに質問ですが、つぎの【壽光院昭室良順大姉】のうち、どの部分が戒名でしょうか。おそらく、ほとんどの方が【】内のすべてを戒名と思われたのではないのでしょうか。しかし、正解は【良順】の部分のみです。それ以外の部分を簡単に説明します。

壽光院はいわゆる【院号】で元は天皇の住まいや尊称を指します。古来よりお寺一つを建立するほどの貢献をした人に授けられていました。小値賀では軒号や庵号が区別をもって用いられますが本来は同じ意味合いです。次の昭室は【道号】といい、目上の者を本名で呼ばないという中国の風習から生まれたものです。そして、最後の大姉は【位階】といって性別や信仰心の深浅を表します。今日ではそれらを総称して戒名と呼んでいますが、今から私が記すのは【良順】の部分、つまり、狭義の戒名についてです。

多くの方が戒名を死後の名と捉えられているようですが、本来は生前に仏教徒のルールである戒を僧侶から授かり、その証として戒名は与えられるものです。いつから戒名の習慣が始まったのかははっきりと分かっていないのですが、お釈迦様の十大弟子の一人であるサーリプッタ(漢訳名は舍利子)は本名をウパティッサといい、サーリプッタの名は「サーリーという女性の息子」という意味でお釈迦様の弟子になってから付けられた名ですので、戒名のはしりと言ってもいいかもしれません。その後、時代が経つにつれて明らかに本名とは思えない仏教用語を用いた名が多くなり、出家すると名を改める習慣が定着していった様子が伺えます。このように当初はお坊さんのみであった戒名ですが、日本では次第に在家者にも授けられるようになります。来日した鑑真和尚によって聖武天皇に【勝満】という戒名が授けられたことは有名ですが、この件は出家したお坊さんのみならず在家信者にも授けられるようになる契機となったのではないのでしょうか。他にも武

将の武田晴信、上杉輝虎は受戒を経て、戒名の信玄、謙信を名乗るようになったのは有名な話です。彼らのように生前に戒名を授かるのは、芸能人の改名と同じように心機一転して生き方を変えることを示しますが、それとは異なり、死後に戒名を授かるのはなぜでしょうか。それは戒の持つ力によります。戒とは仏教徒が守るルールのこと、基本となるのは《生き物を殺してはいけない》《与えられていないものを取ってはいけない》《偽りを述べてはいけない》《パートナー以外と性行為をしてはいけない》《お酒を飲んではいけない》という五つでこれを「五戒」といいます。いずれも身心を汚す可能性のあるものから距離を取っているのが特徴です。例えば、昼間に比べて夜に外出すると交通事故や悪い人に絡まれるなど種々の危ない目に遭う可能性が上がります。だから、夜に外出して、そのような場面に出くわしてから身を護るのではなく、そもそも夜に外出しないことで事前に身を護ることができます。戒もそのように身心を損なうような場面を予め作らないことで身心を護るようになっていきます。そのため、仏教において戒には「防非止悪(非を防ぎ、悪を遠ざける)」の効果があると言われ、戒によって仏教徒は悪から守られると考えられました。

今日の日本で行われている仏式の葬儀は浄土真宗を除いて殆どの宗派において葬儀の冒頭部分で故人に対して戒を授け、戒名を付ける儀式が入ります。それは戒の持つ「お守り」の力によって、故人から悪や非を遠ざけ、ご冥福をお祈りするということです。近年、戒名については色々と言われていますが、このような宗教的な意味合いを知る事でまた見る目が変わってくるのではないのでしょうか。

日曜日に坐禅会をやってみます。

◆日程 11月1日・8日・15日・22日・29日

◆時間 午前9時～9時半

◆参加 無料

◆申込 不要

※肌寒くなってきましたので、ブランケットなどをご持参頂いて、足元にかぶせて頂いても結構です。

釈迦の生

～episode2～



前回のおさらい

今回は、シッダッタさん(お釈迦様)が誕生し、いきなり歩いたり喋ったりしたことに触れ、老齢の苦行者アシタが後にブッダとなるシッダッタさんの教えを聞けないことに涙したところまでお話をしました。

王子の未来を予言

誕生からしばらく経つと、お父さんのスドーダナ王は王子(シッダッタさん)の命名式を挙行し、そこに百八人の宗教者を招きました。この当時、まだ仏教は生まれていないわけで、百八人の宗教者は仏教以外の宗教(外教)になります。当たり前ですが仏教は仏教以外では悟れないと説きますので、それゆえ、外教の宗教者たちに煩惱の数を表す百八を当てたのかもしれませんが。その百八人の中の優秀な八人にシッダッタさんの顔相を占わせました。すると、そのうちの七人は二本の指をあげて母マーヤー妃が懐妊したときと同様に二通りの予言をします。「在家の生活を送れば転輪聖王となり、出家すればブッダとなられましょう。」と。転輪聖王とはインドにおいて求められる条件を全て兼ね備えた理想的な王のことです。しかし、残る一人は一本の指をあげて、「この方が家庭に留まるなんてことはない。必ず出家してブッダとなりましょう。」と予言します。こう告げた彼の名は【コンダンニャ】といって、後々にも登場する重要人物の一人です。

このような予言を聞いて素直に喜ばない人が居ました。スドーダナ王です。是が非でも出家を阻止して王位を継いでもらいたい王は家臣たちに、「王子は何を見たら出家してしまうだろうか。」と尋ねます。すると、家臣たちは、「老人と病人と死人と出家者を見たなら出家なさるでしょう。」と答えました。それを聞いた王は、この四種類の間がシッダッタさんの目に触れないように四方に見張りを置くようにしました。シッダッタさんは蝶よ花よと大切に育てられましたが、折に触れてブッダとなる素養を見せつけます。十六歳に

なったとき、スドーダナ王は息子のために、寒期・熱期・雨期という三つの季節に応じた三つの宮殿を建て、身の回りには四万人の若い美しい女性だけ(後のシッダッタさんの妻となる女性もいる)を置き、まるで、天女の群れに囲まれた神のように過ごしました。スドーダナ王はシッダッタさんに世俗で得られる幸せを全て与え、シッダッタさんもそれを享受していたのです。

初めて見る老人

ある日、シッダッタさんは御者を伴い園遊地に出掛けます。そこで、歯が抜け、髪が白く、前かがみのくたびれた身体で、杖を手にヨボヨボと歩いている者を目にします。このような様相の間を初めて見たシッダッタさんは御者に、「この者はどうしたのか。髪の色も他の者とは違って見えるが。」と尋ねると、御者は、「老人です。」と答え、人はいずれ老いることをシッダッタさんは知らされます。それを聞き、「生まれる事は厭わしい。生まれるから老いがあるのだ。」と嘆かれ、その場から引き返して宮殿に戻ってしまいました。御者から理由を聞いたスドーダナ王はこのままだと出家してしまうと危機感を覚え、「王子のために歌舞の用意をさせよ。幸せを感じているうちは出家の気持ちは起こすまい。」と言って、見張りを更に増やしましたが、また、ある日は園遊地の途中で病人を見て、また、ある日は死人を見て、シッダッタさんの悩みは最高潮に達しました。そうして、塞ぎこんでいたシッダッタさんはしばらくして、また園遊地に出掛けます。そこで目にしたのは整然と衣をつけた出家者でした。シッダッタさんの気持ちは出家へとグッと傾くこととなります。

以上の老人、病人、死人、出家者と出会う一連の流れは「四門出遊」と呼ばれる有名なエピソードになります。このエピソードで仏教がいう幸せ、テーマがはっきりと判ります。シッダッタさんは王子の身分もあり、財産もある。自らの容姿も整い、素敵な異性も身の回りに居て、美味しいものばかりを食べるといような最上の暮らしをしてきましたが、それを幸せとは考えなかったのです。なぜなら、老病死という根源的な苦しみがある以上はそれらに価値を感じられなかった。この万人に訪れる老病死こそが仏教のテーマであり、その苦を克服することこそが幸せだと考えたのです。シッダッタさんはブッダとなった後、「この世間が燃えあがっているのに、一体何が笑いだ、何が喜びだ。お前たちは暗闇に覆われていながら、どうして明かりを探し求めないのだ。」(ダンマパダより)という言葉を残しておられますが、青年時代のシッダッタさんの苦悩を表しているようです。